

【参考資料】果樹カメムシ類について

佐賀県農業技術防除センター

1) 発生生態

- ・果樹カメムシには、チャバネアオカメムシ（体長 10～12mm）、ツヤアオカメムシ（体長 14～17mm）、クサギカメムシ（体長 13～18mm）、ミナミトゲヘリカメムシ（体長 16～23mm）、ミナミアオカメムシ（体長 12～16mm）の 5 種が知られており、佐賀県では前 3 種が主要な種である。
- ・チャバネアオカメムシ成虫は広葉樹の落ち葉下で、ツヤアオカメムシ成虫は常緑樹の樹上で越冬する。
- ・4 月～6 月に、成虫がウメ、モモ、カンキツ、ナシ等に飛来し、吸汁し、被害を与える。
- ・6 月～10 月に、成虫がヒノキ球果に産卵し、増殖する。
- ・7 月～10 月に、成虫がヒノキ球果から離脱し、カンキツ、ナシ、カキ等に飛来し、加害する。



チャバネアオカメムシ

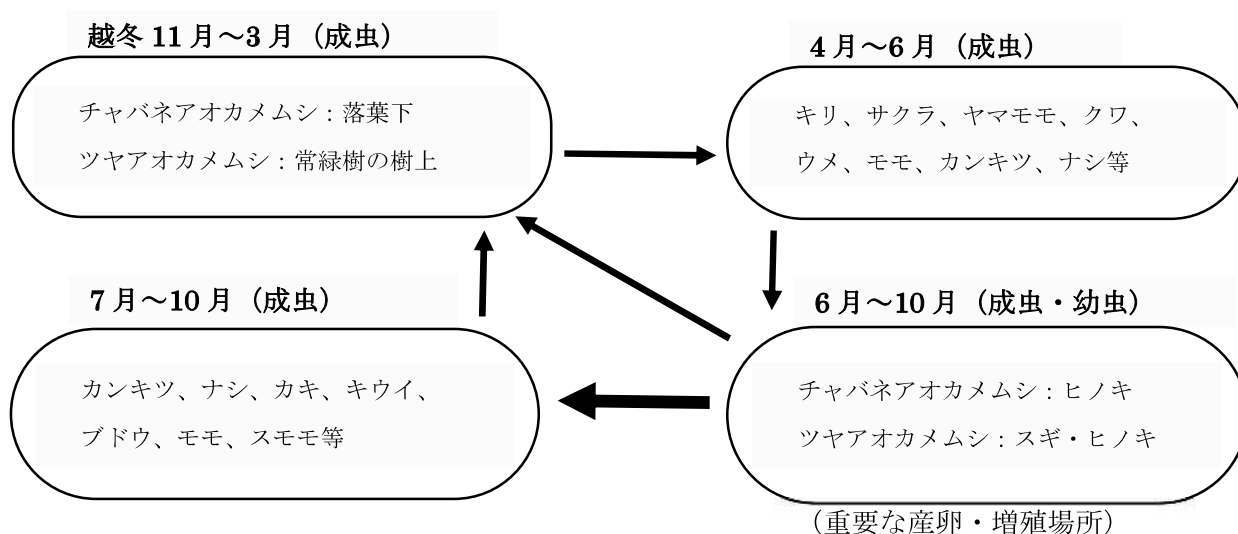


ツヤアオカメムシ



クサギカメムシ

チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシの生活史



2) 防除のねらい

(1) チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ

- ① 果樹カメムシ類の発生量は前年の針葉樹の球果の量とカメムシの越冬量によって大きく異なり、当年の球果の量によって果樹園への飛来時期も異なる。
なお、ヒノキ球果のカメムシの口針鞘数が1果当たり25本以上になると、園に飛来する可能性が高くなるため、飛来の目安にできる。
- ② 果樹カメムシ類は突発的に果樹園に飛来し、果樹園に侵入した後、集合フェロモンで同種を大量に誘引し甚大な被害を及ぼすので、早期発見に努め果樹園への飛来を認めたら直ちに防除を行う。なお、ヒノキへの寄生状況や電灯への誘引状況を観察するとカメムシ類の動きを把握することができる。
- ③ 熟期が早い早生品種や尾根沿いの園、スギ・ヒノキ林周辺の園では、早い時期から被害を受けやすいので、特に注意する。
- ④ 地域全体で一斉防除を行うと高い防除効果が得られる。
- ⑤ こまめに園内を見て回り、確認した場合は早急に防除を行う。
- ⑥ 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類が多発する恐れがあるため、これら害虫の防除対策も実施する。
- ⑦ 施設栽培では開口部に4mm目の防虫ネットを設置する。

3) 語句説明

○ヒノキ球果

果樹カメムシ類は種子を本来の餌としており、特に成熟したヒノキやスギの球果にある種子が主な餌となる。

- ・着果数が多い：餌が豊富なため、ヒノキ球果からの離脱は少ないか、離脱時期が遅くなる。また、当年世代が増加する。
- ・着果数が少ない：餌が少ないため、ヒノキ球果からの離脱時期が早まる可能性がある。



ヒノキ球果

○口針鞘

カメムシは、口針を種子に突き刺し、唾液を分泌して溶かした種子の成分を吸汁する。口針を引き抜く際に球果に残った余分な唾液が固まったものを口針鞘という。

ヒノキ球果の口針鞘数が約25本になると、餌を求めて離脱し、樹上から成虫数が減少することが分かっている。このことから、球果の口針鞘数を計測し、離



脱時期の目安としている。

○予察灯

光に集まる習性を利用して、集まった成虫数を調査する器具。



予察灯